

Dokkyo Journal of Medical Sciences

42 (3) : 215~223, 2015

国境を超える感染症 狂犬病

井上 智<sup>1)</sup>、 畠山 薫<sup>2)</sup>、 水越 文徳<sup>3)</sup>、 野口 章<sup>1)</sup>

- 1) 国立感染症研究所獣医科学部
- 2) 東京都健康安全研究センター
- 3) 栃木県保健環境センター微生物部

狂犬病は、世界中で毎年 55,000 人以上が死亡している動物由来感染症 (Zoonosis、人獣共通感染症) である。いったん狂犬病を発症すると、急性、進行性、致死性の脳炎を示してほとんどが 10 日以内に 100% 致死する。患者の 99% 以上は狂犬病を発症したイヌによる咬傷が原因であり、その 30-50% は 15 歳以下の子供である。すべての哺乳類が狂犬病ウイルスに感染して狂犬病を発症するが、流行を維持している動物種は限られており、国や地域によってヒトが感染する危険性の高い動物種は異なる。食肉目に属するイヌ、キツネ、アライグマ、スカンク、マンダース、コヨーテ、オオカミ、ジャッカルなどで流行が維持されている。狂犬病の発生している地域では、ヒトの生活に近接するペット動物 (主にイヌとネコ、米国ではフェレット) がヒトに対して最も危害度の高い動物となる。

近年、中国、インド、インドネシア、フィリピン、ベトナム等で狂犬病の発生が拡大していることを考えると、狂犬病は依然として公衆衛生において重要な動物由来感染症である。アジアでは今もイヌの狂犬病対策が極めて重要な課題ではあるが、韓国と北朝鮮の国境沿いに生息するタヌキや中国の安徽省・浙江省・江西省や台湾に生息するイタチアナグマで狂犬病の流行が報告されており、アジアの野生動物における狂犬病の侵淫が気になる。なかでも、半世紀以上も前に狂犬病を淘汰した台湾で、在来の野生動物であるイタチアナグマに狂犬病の流行が確認されたことは、特に大きな驚きであった。